

人文学を学ぶための100冊

	著者	書名	出版社・出版年	備考
【言語文化】 言語	本田弘之・岩田一成・倉林秀男	街の公共サインを点検する—外国人にはどう見えるか	大修館書店、2017年	身近な公共サイン（公共施設等の案内表示）の使用言語や表記・デザインの望ましいあり方を考えながら、日本の多言語状況の特徴、街づくりにおける「ことば」の役割を理解する。
	ロンプ・カトー（著）、米原万里（訳）	わたしの外国語学習法	ちくま学芸文庫、2000年	1909年に生まれ、その生涯を母国ハンガリーで過ごしながら14のヨーロッパ系言語と中国語、日本語を独学で身につけた著者による外国語学習得術の紹介。
	鈴木孝夫	ことばと文化	岩波新書、1973年	人称代名詞や親族名称の用例を使い、日本語と日本文化を他の言語・文化と比較・対照し、日本語と日本文化の特徴をわかりやすく明解に論じる。
	黒田龍之助	はじめての言語学	講談社現代新書、2004年	日本語学や英語学を包含する言語学を専攻する前提として、まずは身近な日本語や英語に興味を持ってほしいという観点から、言語に対する考え方を紹介している。
	江利川春雄	英語と日本人—挫折と希望の二〇〇年	ちくま新書、2023年	日本の英語教育史研究者が幕末期からの英語教育史を記述し、将来を展望する論考。
	白井恭弘	英語教師のための第二言語習得論入門（改訂版）	大修館書店、2023年	英語教師向けに書かれた第二言語習得論の入門書であるが、学習者の立場からも第二言語習得の基礎についての入門書となる。専門的に研究する前に知っておくべき概念を学習できる。
	中田達也	英語は決まり文句が8割 今日から役立つ「定型表現」学習法	講談社現代新書、2022年	話し言葉でも書き言葉でも言語使用の多くを占めると言われている定型表現（複数語句表現）について、その実態と学習方法について学ぶことができる。
	田中克彦	ことばと国家	岩波新書、1981年	母語と母国語の違いはなにか？国家語成立の過程で作り出されることばの差別の諸相を明らかにする。
	金木敏	ヴァーチャル日本語 役割語の謎	岩波書店、2003年	アニメや漫画などで、よく使われる博士語や田舎言葉が、実は現実の世界では殆ど使用されない「ヴァーチャル」なものであることを指摘している。
	井上史雄	日本語ウォッチング	岩波新書、1998年	「ら抜きコトバ」「～じゃん」などの若者言葉とされている表現の奥にある言語のメカニズムについて明快に解説する。
	亀井伸孝	手話の世界を訪ねよう	岩波ジュニア文庫、2009年	手話やろう文化について知ることとおして、言語の多様性と異文化理解のための考え方を学ぶことができる。
	中村桃子	女ことばと日本語	岩波新書、2012年	最近あまり使用されなくなってきた「女ことば」の歴史的、社会的、文化的背景を示しており、日本語の「女ことば」の意味を改めて考えさせられる。
	川原繁人	音とことばのふしぎな世界—メイド声から英語の達人まで	岩波科学ライブラリー、2015年	身近な例から音声学の諸分野やその手法について知ることができる。
	築島裕	歴史的仮名遣い—その成立と特徴	吉川弘文館、2014年	「現代かなづかい」が、どのような経緯で登場したのか、その源流である「歴史的仮名遣い」の成立について、詳細な資料とともにまとめている。
	井上ひさし	國語元年	新潮文庫、2017年	今から約150年前、日本が近代へと、また、「国家」として統一しようとしている時、多様な方言もまた統一しようとした人物の奮闘を戯曲にしたもの。登場人物が多いが比較的読みやすく、当時の日本語の実態を知る上で参考になる一冊。
	寺澤盾	英語の歴史—過去から未来への物語	中公新書、2008年	約1,500年にわたる英語の歴史を辿る。英語のルーツから、語彙の増大、綴り字・発音・文法の変化、国際語としての現代の英語、さらには英語の未来についても考察する。
	大津由紀雄（編）	ことばの宇宙への旅立ち	ひつじ書房、2008年	ことばについて研究している研究者5人が自らの体験や研究内容について述べている。言語研究の楽しさ・面白さの一端を知ることができる。続編もある。
	白井恭弘	ことばの力学—応用言語学への招待	岩波新書、2013年	外国語教育、バイリンガリズム、言語政策、言語障害などの問題を科学的に解決するための言語学と言われる「応用言語学」の入門書。
	パウロ・フレイレ（著）、三砂ちづる（訳）	被抑圧者の教育学—50周年記念版	垂紀書房、2018年	解放の教育学はこの本から始まった。教育の視点から「抑圧の文化」に対峙する視点を提示する。世界中で読み継がれている教育思想と実践の書であり、常に新しい読者を獲得してきた信頼の一冊。
	宮崎里司・杉野俊子（編著）	グローバル化と言語政策—サステナブルな共生社会・言語教育の構築に向けて	明石書店、2017年	本書は、国内外と移民・マイノリティ・各専門分野別の言語政策について検証し、グローバル化の進展のなかで日本が示すべき政策について示唆を与える。

人文学を学ぶための100冊

	著 者	書 名	出版社・出版年	備 考
【 言 語 文 化 】 文 学	ソポクレス、藤沢令夫 訳	オイディプス王	岩波文庫、1967年	ギリシア悲劇を代表する傑作。悲劇の入門書としても最適。運命から逃れようとした オイディプスを待ち受けていたのはあまりにも悲劇的な真実だった。「この世のさきに至るまでは、何びとをも幸福と呼ぶなかれ」
	シェイクスピア、河合 祥一郎訳	ハムレット	角川文庫、2003年	沙翁の四大悲劇の一つ。ハムレットの台詞「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」（第三幕第一場）は有名。決断と逡巡、沈思と激情、信用と不信の間を何度も往復する青年ハムレットの苦悩を描いた名作。
	ゲーテ、竹山道雄訳	若きウェルテルの悩み	岩波文庫、1951年	婚約者のいる女性に叶わぬ愛を傾け、絶望を深めてゆくウェルテルの綴る手紙と編者の日記で構成。若きゲーテの恋愛体験に基づく。ウェルテルに人生の一時期を重ねられない読者は不幸だ、とゲーテは語った。
	ディケンズ、村岡花子 訳	クリスマス・キャロル	新潮文庫、2011年	19世紀のロンドン。町はクリスマス祝歌で賑わう。石炭一片もケチる守銭奴スクルージは、甥のクリスマスパーティーの誘いを断り、冷えたアパートで孤独な夜を過ごす。そこに現れたのは元同僚マーレイの幽霊だった。
	カズオ・イシグロ、土 屋政雄訳	わたしを離さないで	ハヤカワepi文庫	TVドラマ『わたしを離さないで』（綾瀬はるか主演）の原作。寄宿学校で学んだキャシーたちは、16歳でコテージに移り住み、年長者たちと共同生活を始める。将来の夢を語り合うキャシーたちを待ち受ける 運命とは？
	ルイザ・メイ・オル コット、麻生丸美訳	若草物語	光文社古典新訳文庫、 2017年	19世紀アメリカ東部。それぞれ違った個性を持つ4人姉妹について、次女のジョーが語る家族の物語。南北戦争下の厳しい状況において、家族で助け合い、自立を目指し成長する姿を描く。女性作家による自伝的作品。
	マーク・トウェイン、 村岡花子訳	ハックルベリー・フィンの冒険	新潮文庫、1959年	19世紀アメリカ南部。孤独な少年ハックと黒人奴隷ジムの友情と冒険の物語。自由を求める冒険の中に、社会問題も描かれている。トム・ソーヤーの冒険でも知られる作家によるアメリカ文学の名作。
	J・D・サリン ジャー、村上春樹訳	キャッチャー・イン・ザ・ライ	白水社、2006年	20世紀アメリカ・ニューヨーク。思春期男子の悩みと葛藤、怒りを主人公の視点で語る物語。「ライ麦畑でつかまえて」としても知られるアメリカ文学のベストセラー。
	北村 紗衣	批評の教室 ― チョウのように読み、ハチのように書く	ちくま新書、2021年	イギリスとアメリカの文学、映画、音楽を幅広く取り上げ、作品の読み方と分析を例示しながら批評的なアプローチを紹介。作品を楽しみ、深く理解するためのエッセイのような批評入門書。
	中野美代子	西遊記―トリック・ワールド探訪	岩波新書、2000年	一見、妖怪たちを相手に孫悟空が大暴れをするだけの物語のなかに、じつは陰陽五行や煉丹術など、中国の伝統的な思想が緻密に組みこまれていることを解きあかす。同著者による翻訳（岩波文庫）もあわせて読むと、作品観が一変するはず。
	魯迅、竹内好訳	阿Q正伝・狂人日記 他十二編（呐喊）	岩波文庫、1981年	近代中国を代表する小説家、魯迅の短編集。中華民国が建国してまもない時期に、中国人とは何かを問い、その行く末を憂えたもの。その問いは時代と民族を越えて、今のわたしたちにも突きつけられている。
	渡部泰明	和歌とは何か	岩波新書、2009年	三十一文字からなる和歌のレトリック（枕詞、序詞、掛詞、縁語、本歌取り）を懇切に解き明かしながら、それらレトリックに、「儀礼的空間」を喚起する働きがあることを述べた、和歌の入門書、
	紀貫之・紀友則・凡河 内躬恒・壬生忠岑選、 小町谷照彦訳注	古今和歌集	ちくま学芸文庫、2010 年	初の勅撰和歌集。四季と恋を中心に構成され、日本人の美意識に多大な影響を与え続けた。古今和歌集をはじめ約45万首が収録される『新編国歌大観』（角川書店）はCD-ROM版も便利。
	紫式部、角田光代訳	源氏物語（全8巻）	河出文庫、2023年-2024 年	光源氏の栄華と苦悩を中心に、人間の真実を描き出す物語。現代語訳ではほかに谷崎潤一郎訳（中央公論社）、漫画なら大和和紀『あさきゆめみし』がおすすめ。原文は新潮古典集成や新日本古典文学全集（小学館）が読みやすい。
	作者未詳、尾崎士郎訳	平家物語（上）（下）	岩波現代文庫、2015年	平氏一門の栄華と滅亡を「諸行無常」「盛者必衰」をテーマに描く。合戦場面は武士たちの勇猛さを生々しく伝え、貴族や女性たちの悲劇は涙を誘う。源平合戦による社会の動揺を叙情性豊かに表現する。
	樋口一葉	大つごもり・十三夜他五編	岩波文庫、1979年	二十代半ばで夭折した一葉は、時代や社会の底辺でもがく女性たちの〈理不尽〉を見据え、描いた。
	夏目漱石	それから	新潮文庫、1948年	三代になっても定職に就かない〈高等遊民〉代助だが、彼には持論がある？ 漱石の講演集『私の個人主義』（講談社学術文庫）と併読したい小説。現代文明論を展開しつつ、恋愛という普遍的なテーマで読みやすい。
	三島由紀夫	金閣寺	新潮文庫、2003年	既存の人生観、社会の諸価値観ないし美意識を逆転してみせるレトリックとしての小説だが、隠喩・寓意・象徴と構造などがどのように鮮やかに展開されているのかが読みどころ。
	テリー・イーグルト ン、大橋洋一訳	文学とは何か―現代批評理論への招待（新版）（上）（下）	岩波文庫、2014年	近現代の世界の文学の様々な理論を紹介し、大きく俯瞰しながら、具体的に明晰な批評原語で精細に各文学潮流を論じ、明確なる視座を提供する入門書。文学専攻の学生の必読書。
	丸山圭三郎	言葉と無意識	講談社現代新書、1987 年	人間の内面世界、あるいは文学・芸術の最深处でみたまぬ生のエネルギーがどのように奔出し、また狂気とエロティシズムとしてどのように表象されているかを精緻に照射した哲学的な探検。

人文学を学ぶための100冊

	著者	書名	出版社・出版年	備考
【思想文化】	戸田山和久	教養の書	筑摩書房、2020年	教養とは何かを異様に軽快な語り口で議論する本。しかし、内容は真剣そのもの。教養は単なる知識や情報とどう違い、なぜ必要とされるのかを理解することができる。
	串田孫一	ギリシア神話	ちくま文庫、1990年	ギリシア神話は聖書と並ぶヨーロッパ文化の知識の源泉。プルフィンチ「ギリシア・ローマ神話」（岩波文庫、1987年）がお薦めだが、詳しくすぎると思う人は、せめてこの本でギリシア神話の精髓に触れてみよう。
	野田又夫	デカルト	岩波新書、1966年	「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉で知られる、近世哲学の祖としてのデカルトについての古典的名著。
	小田垣雅也	キリスト教の歴史	講談社学術文庫、1995年	西洋を理解する上でキリスト教の知識は不可欠！これ一冊でキリスト教思想史のほぼ全容を学ぶことができる。
	貝塚茂樹	孔子	岩波新書、1951年	東洋の知を学ぶ上で孔子は外せない。碩学による古びぬ名著。
	加藤隆	一神教の誕生—ユダヤ教からキリスト教へ	講談社現代新書、2002年	キリスト教はユダヤ教とどのような関係にあり、何をきっかけに分かれていったのだろうか。細かい教えにとらわれず二つの宗教を分析した良著である。
	内藤正典	ヨーロッパとイスラーム—共生は可能か	岩波新書、2004年	少し内容は古いが、ヨーロッパとイスラームの関係を現代の視点から解明した本。異なる信仰や文化をもった人々との共生は可能か。いまだに宗教問題に悩むヨーロッパ。
	岡本亮輔	聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで	中公新書、2015年	ただ静かに折るだけではなく、具体的に身体を動かすことも宗教の成立にとって必要な要素である。人は聖地に何を求め、なぜそこに向かって歩くのか。
	岩田靖夫	ヨーロッパ思想入門	岩波ジュニア新書、2003年	『旧約聖書』と『新約聖書』の思想についてもかなりの紙幅を割いた異色のヨーロッパ思想史。聖書を知ってから、外国に行こう。
	石田勇治	ヒトラーとナチ・ドイツ	講談社現代新書、2015年	当然のように差別がネットにあふれている。この光景は過去にも見たはずである。ヒトラーは何をしたのか。いまなお欧米文化に深く刺さるとげが抜ける日はくるのだろうか。
	丸山真男	日本の思想	岩波新書、1961年	日本人の思想的営為の特徴をえぐり出す。
	末木文美士	日本仏教史—思想史としてのアプローチ	新潮文庫、1996年	仏教伝来から鎌倉仏教、近世仏教に至るまでの日本仏教の本質について、思想的なアプローチで論じたもの。明快な語り口で理解しやすい良書。
	鈴木大拙	禅と日本文化 新訳完全版	角川ソフィア文庫、2022年	日本文化全般に禅の精神を探る。
	伊藤聡	日本像の起源 つくられる〈日本的なるもの〉	角川選書、2021年	神国思想、神代文字、やまとだましひ、など日本文化固有とされる事柄が、中国やインドなどの外国と自国との対比の中で創造されていく過程を、日本思想史の立場から述べたもの。
	山本ひろ子	中世神話	岩波新書、1998年	中世の人々は、仏教によって神々の解明に取り組み、古代とは全く異なる神話世界を見いだした。中世人の構想する神話世界への入り口となる良書。
	蓮実重彦	監督 小津安二郎（増補決定版）	ちくま学芸文庫、2016年	小津映画を説話論と主題論の絡み合いから評論し、小津論のみならず、映画批評の言説自体さえも変えてしまった、驚くべき映画論。
	大野裕之	チャップリン 作品とその生涯	中公文庫、2017年	最新のチャップリン研究の成果に基づきつつ、平易な語り口でその魅力を述べている。
	アンドレ・バザン、堀潤之訳	オーソン・ウェルズ	インスクリプト社、2015年	オーソン・ウェルズの映画作家としての革新性を擁護し賞賛する本書は、バザン映画批評の原点にして、そのエッセンスといった趣がある。
	伊藤弘了	仕事人生に効く教養としての映画	PHP研究所、2017年	「教養」としての映画を紹介するのみならず、本格的な映画学入門の書ともなっている。
	今道友信	美について	講談社現代新書、1973年	美学入門の書。今道の語る美は、自然美や芸術美のみならず、近年ふれられることが少なくなった人格美まで幅広く含む。その情熱的な語り口自体が美的。

人文学を学ぶための100冊

	著者	書名	出版社・出版年	備考
【歴史文化】	高橋昌明	定本 酒呑童子の誕生 もうひとつの日本文化	岩波現代文庫、2020年	酒呑童子の説話が生まれた経緯を歴史学的手法を駆使して明らかにする。
	網野善彦	日本の歴史をよみなおす(全)	ちくま学芸文庫、2005年	日本史の常識を打ち破る書。より高度な内容に進みたい場合は同氏の『無縁・公界・楽』(平凡社ライブラリー、平凡社)の講読をお薦めする。
	尾藤正英	日本文化の歴史	岩波新書、2000年	平易に書かれた日本文化史であるが、随所に氏ならではの刺激的かつ眼を覚まさせる指摘がなされている。
	馬部隆弘	橋井文書 日本最大級の偽文書	中公新書、2020年	地域の歴史を書くために使われてきた文書群が、偽物だったという話。
	勝俣鎮夫	一揆	岩波新書、1982年	一揆を単に民衆闘争とのみ理解している人にとっては、眼からうろこの落ちる本である。
	神坂次郎	元禄御皇奉行の日記 尾張藩士の見た浮世	中公新書、1984年	1人の尾張藩士が遺した日記を手がかりに元禄時代の世相を復元する。
	鬼頭宏	人口から読む日本の歴史	講談社学術文庫、2000年	四つの人口増加の波を中心とした日本通史。さまざまな示唆に与えてくれる。
	石光真清編著	ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺書(改版)	中公新書、2017年	敗者からみた明治維新。明治国家とは、その敗者が勝者とともに創りあげたものであることを心に留めるべき。
	飛鳥井雅道	明治大帝	文春学芸ライブラリー、2017年、初刊は1989年	天皇制を克服しようとする著者が「大帝」と呼ぶにふさわしい存在として描き出した明治天皇の伝記。
	藤原彰	餓死した英霊たち	ちくま学芸文庫、2018年	アジア太平洋戦争の実態を余すところなく伝えた告発の書。
	川北稔	砂糖の世界史	岩波ジュニア新書、1996年	茶や綿織物とならぶ「世界商品」である砂糖に焦点をあてて、近代世界史をダイナミックに描く。
	弓削尚子	啓蒙の世紀と文明観(世界史リブレット88)	山川出版社、2004年	人文主義の延長にある啓蒙思想の文明観から近代ヨーロッパの「知」がはらむ光と陰を折出する。
	遅塚忠躬	フランス革命—歴史における劇薬	岩波ジュニア新書、1997年	フランス革命の世界史における意味を時代の文脈のなかで考察した名著。
	姫岡とし子	ヨーロッパの家族史(世界史リブレット117)	山川出版社、2008年	18世紀から現在までの産業化の進展のなかで、ドイツ、イギリス、フランスの労働や家族のあり方とその理想像はどのように変化したのか。
	金澤周作	チャリティの帝国—もうひとつのイギリス近代史	岩波新書、2021年	国家とは異なるセーフティネットとして機能したチャリティを通じて、近現代イギリスの特徴が明らかにされる。
	薩摩真介	〈海賊〉の大英帝国 掠奪と交易の四百年史	講談社選書メチエ、2018年	イギリスは〈掠奪〉で世界の海を制した! 実態としての海賊行為を軸として、近世・近代の世界史が描き直される。
	池上俊一	動物裁判	講談社現代新書、1990年	中世ヨーロッパでは、豚やバツタを被告として実際に裁判が行われていた。こうした動物裁判をてがかりに、社会や思想、人間と自然との関係について考察する。
	辻内綾人・中條献	キング牧師—人種の平等と人間愛を求めて	岩波ジュニア新書、1993年	アメリカ公民権運動の指導者キング牧師の自伝。英雄伝としてではなく、誤りを克服しながら成長する人間の姿が生々しく描かれている。
	和泉真澄・坂下史子・土屋和代・三牧聖子・吉原真里	私たちが声を上げるとき—アメリカを変えた10の問い	集英社新書、2022年	差別的な世間や常識、それが構造化された社会と闘った10人の女性を取り上げたアメリカ現代史。自分事として読んでもらいたい。
	小野寺拓也・田野大輔	検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?	岩波ブックレット、2023年	歴史上の「功罪」を評価する際に、両論併記は必ずしも中立公平ではなく、そのほうが偏っている可能性があることを知るために、ぜひ読んでもらいたい。

人文学を学ぶための100冊

	著者	書名	出版社・出版年	備考
【環境文化】	楠原佑介	地名で分かる水害大国・日本	祥伝社新書、2016年	地理・歴史を中心とする人文的知を活用し、土地に刻まれた歴史としての「地名」から水害リスクを考える入門書。地理・歴史の観点から水害対策を考える際にも有用。
	井手明	悲劇の世界遺産―ダークツーリズムから見た世界	文春新書、2021年	人文学の研究対象、地理や歴史の学習などに有用な世界遺産の新たな見方として、ダークツーリズム（戦争や災害などの悲劇の記憶を巡る旅）という視点を提示する。
	小林文広、高木博志、三枝暁子	京都の歴史を歩く	岩波新書、2016年	地図や写真等、豊富な資料を使って京都の歴史地理を紹介している。資料が豊富なため、読むだけでも京都に行った気分になれる。
	金田章裕	地形と日本人	日経プレミアシリーズ、2020	私たち日本人はどこで暮らしてきたのか。主に地形に着目して、古地図や地形図を用いながら読み解く。歴史と地理の名を併せ持った「歴史地理学」の入門書。
	佐々木正人	アフォーダンス（新版）	岩波科学ライブラリー、2015年	人間を含む生物と環境との関わりを考えるときのヒントに、心理学における「アフォーダンス」の概念がある。建築やデザイン、哲学の分野からも注目を集めるアフォーダンス理論を学ぶための最善の入門書。
	オルダス・ハクスリー、大森望訳	すばらしい新世界（新訳版）	ハヤカワepi文庫、2017年	様々なSF作品の典拠であり続けていることにとどまらず、20世紀初頭のイギリスの科学思想（特に生物学と遺伝学）を探究するためのアーカイヴである点で、思想史の観点からも興味深い。
	E・W・サイード、今沢紀子訳	オリエンタリズム（上）（下）	平凡社ライブラリー、1993年	オクシデントとオリエントの関係から知の権力の側面を壮大なスケールで描き出した、サイードの代表作。帝国主義につきうごかされた現代史を通観する上でも最適の一冊。
	メアリー・シェリー、芹澤恵訳	フランケンシュタイン	新潮文庫、2014年	ゴシック小説の最高傑作。19世紀イギリスの生命観を見事に描き出しており、今日のそれとの対照により、21世紀の生命倫理を考える上でも役に立つ。
	ジリアン・テット、土方奈美訳	サイロ・エフェクター―高度専門化社会の罠	文春文庫、2016年	気鋭の人類学者による話題の書。専門効率化が進むと、組織が細分化して情報が共有されず、「サイロ」から抜け出せなくなる現象が生じる。創造的であるために境界を超えよう！
	中川裕	アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」	集英社新書、2019年	アイヌ少女が主役の一人として登場し、活躍する人気冒険漫画「ゴールデンカムイ」はアニメ化されたことでも話題になった。この漫画のアイヌ語監修者による公式解説本ともいえるのが本書である。マンガの名場面をもとに、アイヌ文化の解説を行っているために親しみやすくアイヌ文化の入門書としても好適である。
	篠田謙一	人類の起源―古代DNAが語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」	中公新書、2022年	分子生物学の第一人者である筆者が、古人骨に残されたDNAの最新研究成果にもとづいて人類進化史上無視することのできない以下の3つの主要なトピックに挑んでいる。①デニソワ人とネアンデルタール人、ホモ・サピエンスとの関係②「出アフリカ」のシナリオ③日本列島集団形成の多様性
	中川裕	アイヌの物語世界	平凡社ライブラリー、1997年	わかっているようで誤解されている事の多いアイヌの世界観を、豊富な口承文芸に基づいて言語学者が丁寧に説明している。
	宮本常一	忘れられた日本人	岩波文庫、1984年	昭和前半の地方の庶民の暮らしを現地で聞き取った作品。歩くこと、出会うこと、ものを見る視点など、フィールドワークの魅力満載。中でも「土佐源氏」は聞き取り文学の伝説となっている。
	B・アンダーソン、白石隆・白石さや訳	定本 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行	書籍工房早山、2007年	わたしたちはなぜ自分の国や同じ国民に愛着を感じて戦争さえするのか。近代国家の起源と「国」の作り方から考える。
	謝花直美・松元剛・前泊博盛・亀山統一	観光コースでない沖縄	高文研、2023年	辺野古の米軍基地新設をめぐる政府と対立する沖縄県。沖縄の歴史と現状からその理由を考える。
	松村圭一郎	うしろめたさの人類学	ミシマ社、2017年	自分の「うしろめたさ」を手がかりに社会やその向こうの世界について考える。
	斉藤幸平	人新生の「資本論」	集英社文庫、2020年	人類の経済活動が地球を破壊する「人新世」=環境危機の時代。気候変動を放置すれば、この社会は野蛮状態に陥るだろう。それを阻止するには資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならないが、資本主義を捨てた文明に繁栄などありうるのか。豊かな未来社会への道筋を具体的に描きだす。
	ステューブ・J・グールド、鈴木善次、森脇靖子訳	人間の測りまちがい―差別の科学史（上）（下）	河出文庫、2008年	人種、階級、性別などによる社会的差別を自然の反映とみなす「生物学的決定論」の論拠を、歴史的展望をふまえて全面的に批判した力作。差別の根源と科学のあり方を根底から問い直す。
	ユヴァル・ノア・ハラリ、柴田裕之訳	ホモ・デウス（上）（下）	河出文庫、2022年	テクノロジーとホモ・サピエンスの未来をテーマに、「人類はどこへ向かうのか？」ということを経済史の立場から検討する。
ジャレド・ダイアモンド、秋山勝訳	若い読者のための第三のチンパンジー―人間という動物の進化と未来	草思社文庫、2017年	チンパンジー、ボノボと人間の遺伝子は「98.4%」が同じである。人間は「第三のチンパンジー」ともいえる。たった1.6%の差異が、なぜここまで大きな違いを生み出したのか？分子生理学、進化生物学、生物地理学等の幅広い知見と視点から考える。	